

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

一枚のハガキ

2011年・日本映画
配給/東京テアトル
114分

2011 (平成 23) 年 6 月 22 日鑑賞

東映試写室

Data

監督：新藤兼人

出演：豊川悦司/大竹しのぶ/六平

直政/柄本明/倍賞美津子

/大杉連/津川雅彦/川上

麻衣子/大地泰仁

👁️👁️ みどころ

「最後の映画」と宣言した99歳の新藤兼人監督が、自らの「戦争体験」をすべての日本人にプレゼント！若松孝二監督の『キャタピラー』（10年）に続いて、今年の夏は「クジ運」をテーマとした（？）本作でしっかり「戦後66年」を総括したい。

3. 11東日本大震災の被害は甚大だが、それでも「あの戦争」よりはマシ。戦争ですべてを奪われ、かつこれだけクジ運の悪い女だって……。他方、クジ運はよくてもすべてを失った男だって……。 「喪失」と「再生」をわかりやすくかつ力強く描いた、今夏必見の感動作がここに！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■こんな戦争体験を映画にできるのは、この監督だけ！■□■

戦争に行くのは若くてイキのいい兵士だけ。戦争初期はどの国でもそう決まっているが、戦争が長引いたり自国が不利になってくると、予備役の投入はもちろん、かつての大日本帝国のように一方では少年兵を育成し、他方では中年のおじさんたちにも赤紙＝召集令状を。最近観た『ロシアン・ルーレット』（10年）のテーマはゲーム運だったが、本作のテーマはそれとよく似た（？）クジ運……？

「あの戦争」末期の1944年に召集された100人の中年兵は今1つの任務を終えたが、次の任務や任地は上官がクジを引いて決めることに。その結果、フィリピンに赴いた森川定造（六平直政）を含む94人は戦死し、内地勤務となった松山啓太（豊川悦司）ら6名だけが生き残ったが、クジ運だけで生き残ることになった松山たちの心境は？「この映画が最後」と宣言して本作の脚本を書き監督した新藤兼人監督は、1912年4月22

日生まれだから今99歳。自らの体験談を映画化する監督は多いが、1944年4月に32歳で召集された戦争体験を映画にできるのは、ただ1人新藤兼人監督だけ！

■□■あれれ、本作の主演は？■□■

本作のチラシを見ていると豊川悦司と大竹しのぶが仲睦まじく並んで天秤棒をかついでいる姿が印象的だから、主演は当然この2人。そう思うのは当然だし実際にもそうなのだが、本作の前半40分を観ていると、本作の主演は1枚のハガキを松山に託し、自らはフィリピン行き60名のはずれクジ(?)を引いた森川のように思えてくる。「俺が死んで、もしお前が生きていれば、このハガキを妻の友子に届けてくれ」と森川が松山に頼んだのは、2人がたまたま二段ベッドの上と下の「戦友」になったためだ。本作導入部ではそんなストーリーが描かれるが、その後は若松孝二監督の『キャタピラー』(10年)、『シネマールーム25』215頁参照)でもおなじみの「出征送り」のシーンが登場する。『キャタピラー』では出征した夫が手足のない「軍神サマ」として戻ってきたが、本作では森川の「出征送り」のシーンの直後に、友子(大竹しのぶ)が森川の遺骨箱を持つ「英霊の帰還」シーンが登場するから、何ともあっけない。

他方、あの戦争当時、長男が死ねば長男の嫁が次男と再婚することがよくあったが、森川の遺骨(?)を祀った直後、友子にはその話が……。そして話はトントン拍子に進み、友子は定造の弟・森川三平(大地泰仁)と再婚することになるのだが、その後に友子を襲う運命とは？本作前半40分に観る友子の運命はいかにこわいそうだが、ある意味滑稽。また、あの当時の「儀式」にのっとった「出征送り」のシーンや遺骨になっての「英霊の帰還」シーンも滑稽なら、父親である森川勇吉(柄本明)や母親・チヨ(倍賞美津子)の死亡も、ある意味で滑稽。本作でも最高の芸達者ぶりをみせる大竹しのぶの演技によって、戦争の悲劇にクジ運の悪さが重なった友子の悲劇と滑稽さが、前半40分のうちに圧倒的迫力で迫ってくる。これを観ていると、あれれ、本作の主演は？

■□■あっちも最悪なら、こっちも最悪！■□■

前半40分で展開される森川定造の嫁・友子にみる「戦争の悲劇」を観ていると、誰だって「こりゃ最悪！」と思ってしまうはず。しかし他方、生きてわが家に戻ってきた松山を待っていた現実も苛酷だった。100人のうち生き残った6人の中に入ったうえ、愛する妻と父親が待つわが家へご帰還。本来松山の立場はそうだったはずだが、帰ってみるとわが家はおもむけの殻。恐る恐るコトの次第を説明する伯父・利エ門(津川雅彦)の話によると、てっきり松山が戦死したものだと思ひ込んだ松山の嫁・美江(川上麻衣子)は松山の父親とついデキてしまったらしい。ところがどっこい、生きて松山が故郷へ凱旋することになったから、立場を失った松山の嫁と松山の父親は家を捨てて大阪へのとんずらを決め込んだらしい。そこで啓太は大阪のキャバレーで働く妻を訪れてコトのなりゆきを確認し

たが、聞けば聞くほどなるほどそれもやむなしの話ばかり・・・？あっちも最悪なら、こっちも最悪だ。

そこで松山は、こんな日本に未練はない、いっそ広いブラジルに新天地を求めてみよう
と決心したのだが、そこで荷物を整理しているとあの1枚のハガキが。これを忘れていた
のは不覚だったが、こりゃブラジルに行く前に戦友・森川との約束を果たさなければ・・・。
松山がそう思ったのは当然。そして今、リュックを背負った松山が友子の家を訪れてみる
と・・・。

■大杉漣の「怪演」に注目！■

新藤兼人作品には多くの
芸達者な俳優が集結するから、オリジナルなストーリー展開の中でみせる彼らの
個性豊かな演技がいつも注目点。しかして本作では、
前半の「出征送り」や「英
霊の帰還」の音頭取りをする村の世話役、泉屋吉五郎
を演ずる大杉漣の怪演に注
目！毎度おなじみのパター
ンでくり返されるこれらの
シーンをみていると、「こり
ゃパロディ？」と思うほど
新藤流の戦争批判の視点が
組み込まれているが、後半
になると俄然泉屋の存在感
が増してくる。

戦争が終結すれば、その
翌日から日本は民主主義国
に。したがって、嫁ぎ先の
森川家で最初の夫・定造を
はじめ、2番目の夫・三平
から父親・勇吉、母親・チ
ヨまですべて失い、今は1
人でひっそり戦争を恨みな



『一枚のハガキ』

2012年2月21日(火) DVD発売 4,935円

発売元：東映ビデオ 販売元：東映

がら暮らしている友子の家に、村の世話役たる泉屋が頻繁に出入りしているのは心の底からの同情や世話心のせい？本来そうあるべきだが、どうも泉屋が友子に対してスケベな下心を持っているらしいことが少しずつみえてくる。さあ、友子の貞操に風雲急を・・・？ちょうどそんなところにリュックを背負った松山が訪れてきたから、泉屋はついその様子を覗き見することに。あげくの果ては、「お泊り」を経て、翌朝差し向かいで朝食を食べる御兩人に対して泉屋が何とも露骨な皮肉を投げかけたから、ここに家の外に出ての日本男子同士の肉弾対決が。

いい年をした大人が何をバカなことを？そう思うのは当然だが、特に松山の心の中にたまりにたまっているうっぷんを考えると、ついこんな爆発もやむをえないのかも？他方、泉屋の方は柔道五段の猛者らしく、肉弾対決での負けを認めるとその後は人が変わったようにあっさり2人の関係(?)を祝福していくから、根は権力志向者ではなく好人物？そんなわけで、2人がハプニングのように結ばれていくストーリーは、大杉漣の「怪演」によってより大きな説得力を持つことに・・・。

■□■やっぱり、クライマックスはこうでなくちゃ！■□■

大竹しのぶは1957生まれだから、既に54歳。本作前半に見せる戦争の犠牲とクジ運の悪さに耐える女の演技は絶品だが、戦後を迎え、泉屋から暗に「俺の妾になってくれ」と言い寄られる状況下では少しずつその美貌に光が・・・？そして、松山と3度目の結婚をして一緒にブラジルに行くことが決まり、いよいよ出発日を迎えた朝のワンピース姿をみると何とも見違えてしまう。さあ、家の中にある2人の夫・森川定造と森川三平の位牌を燃やし、松山と共に新たな旅のスタートへ。そんなラストシーンでも悪くはないが、それではあまり深みがない。そこで用意した新藤兼人演出による「あっと驚くクライマックス」は何とも感動的だから、あなた自身の目でしっかりと。

2人並んで天秤棒をかついでいるチラシの姿は、森川家には水道はもちろん井戸もないため川から水を運ばなければならないことを示しているが、これは友子の毎朝の仕事だったのでは？そして、2人してブラジルへ行ってしまえば、松山が天秤棒をかつぐ必要はないはず・・・。松山がブラジル行きを決めたのは、すべてを失った松山には固執するものが何もなかったからだ。他方、すべてを失ったことでは全然松山にひけをとらない友子もそれは同じ。2人の結婚も、2人がそんな自由人(?)だからこそできた突然のハプニング(?)だから、ブラジル行きの選択だって突然それが変わることがあってもおかしくはない？今風に言えば、これは「ブレる」ということになるのかもしれないが、決してそうではないことは2人の決断のサマを見れば十分納得できるはず。やっぱ、クライマックスはこうでなくちゃ！

2011(平成23)年6月23日記